

曼荼羅上の大日位と弥陀位の交替（居替）における 台密から東密への影響

鍵 和 田 聖 子

はじめに

現在、曼荼羅図像として大日位・弥陀位の交替を確認できるものに、須弥壇に定印阿弥陀如来を安置し、四天柱に密教諸尊等が描かれた京都伏見日野の法界寺阿弥陀堂がある。近年、西方の柱に大日如来が描かれていることが解り、法界寺阿弥陀堂は金剛界曼荼羅上の大日位・弥陀位を交替した構造であると理解できる。⁽¹⁾ こういった大日・弥陀の交替は東台密共、文献に説かれており、それらを調査した所、時代的に東密より台密の記述が早いことが解った。また、大日・弥陀の交替を説く台密文献の一つに皇慶（九七七～一〇四九）説長宴（二〇一六～一〇八二）筆『四十帖決』が挙げられるが、皇慶は東密と交流があったことが知られる。東密文献に大日・弥陀の交替が説かれるのが、皇慶・長宴以後であることから、その頃台密で先に行われていた事相的伝承が東密に伝わった可能性を考えることができる。

そこで、本論では曼荼羅上の大日・弥陀の交替について時代的整理を行い、皇慶や『四十帖決』を中心とした東台密の交流を考えることで、東密の事相的側面に台密の影響が見られる可能性を探っていきたい。

一 金剛三昧院藏本『四十帖決』について

東密において大日・弥陀の交替を説いた永嚴（一〇七五～一一五二）・覚鑊（一〇九五～一一四四）の直前に東密に伝わったと考えられる台密事相文献が、『四十帖決』である。高野山金剛三昧院藏本に三十四帖から成る古写本があり、一から二十四帖までが同時代の書写と考えられる。四・五・六・八帖に奥書があり、

- ・四帖「治暦四年九月二十二日記之 金剛仏子快算」
- ・五帖「治暦二年三月二十二日賜写之 金剛仏子快算」
- ・六帖「治暦二年三月二十二日於平等院賜写之 金剛仏子快算」
- ・八帖「康平五年十月三十日於宇治書之 金剛仏師快算」

となっている。つまり、一から二十四帖は一〇六一年（康平四年）頃から一〇六八年（治暦四年）頃にかけて宇治の平等院で書写されたものであることが解る。これは、長宴存命時期であり、『大正藏經』のように整理される以前のものである。第一帖の表紙には「長宴抄」と、一葉目の張り紙には「長宴四十帖良祐再治之本池上皇慶……」とあって、この本が『四十帖決』であり『長宴抄』と呼ばれていたことが解る。

東密の興然（一一二〇～一一二〇三）や教舜（一二六四頃）は、度々『長宴抄』の名で『四十帖決』を引用する。両者は共に「長宴抄十四云」として共通の箇所を引くが、その内容は『大正藏經』七十五卷所収の『四十帖決』第七卷十八帖にある。しかし金剛三昧院本では、十四帖にあり、真言宗内では治暦年間の書写以来、金剛三昧院本と同本の『四十帖決』が流布していたと理解できる。

以上より、『四十帖決』が長宴生存時期頃から東密でも読まれていたと考えられる。『四十帖決』にも大日・弥陀の交替が説かれ、金剛三昧院藏本書写直後に東密文献に説かれるようになることから、大日・弥陀の交替がこの頃に台密から東密へ伝わった可能性が考えられる。

二 台密学僧皇慶における東密との交流

先に触れた『四十帖決』の説者皇慶は、長保五年、寂照と

共に鎮西に趣いていた時、景雲から東密を伝授された。⁽³⁾ 元瑜『血脈類集記』によると「寛蓮—寛昭—長憐—景雲—皇慶」〔真言全〕三九・四四頁・下〕とあり、寛蓮は東密広沢流の祖、益信（八二七～九〇六）より「益信—寛平天皇—寛蓮」〔真言全〕三九・一一三～一一五頁〕と相承していることから、景雲より東密広沢流を伝授されたと考えられる。また、寂照からも密教を伝授され、寂照が皇慶に授与した印信には「益信僧正……中略……寂照阿闍梨已上金剛界嫡相承也皇慶阿闍梨⁽⁴⁾」とあり、寂照も東密広沢流系の密教を皇慶に授受したことが解る。さらに『阿沙縛抄』には、台密では『大日経義釈』を伝授することになっていたが、皇慶は北白川の禅覚に『大日経疏』の伝授を請い、以降、台密で『大日経疏』が学ばれるようになったという記述がある（『日仏全』四一・三三五頁・下）。以上、特に皇慶は東密と交流が深かったようだが、これを考慮すると、当時東台密双方の交流が頻繁であったと判断することができ、この時期に事相的伝承が互いに伝わる土壤が整いつつあったのではないであろうか。

三 台密文献における記述

以上のように平安中期頃、東台密の交流が深かったことを考慮しつつ、大日・弥陀の交替について言及する文献を時代を追って確認していきたい。まず、最初期のものとして一行

曼荼羅上の大日位と弥陀位の交替（居替）における台密から東密への影響（鍵和田）

三四

（六八三〜七二七）撰『大日経義釈』が挙げられる。

凡ソ作スニ余仏ノ壇ヲ、如キハ作スガ弥陀壇ヲ、即チ移シテ弥陀ノ入レ中ニ、其ノ大日仏ヲ移シテ就ク弥陀位ニ。
（『正統蔵』二二・四六四頁・上）

ここでは、「余仏」の例に弥陀を挙げ、「弥陀の曼荼羅を作る時は弥陀を中尊とし、大日は弥陀位に移す」と説かれている。この文言は安然（八四一〜八八九、一説九一五没）や覚超（九五五〜一〇三四、一説一〇三七）なども引用しており、『大日経義釈』の説く本尊位の交替が台密内で流布していたことが解る。さらに、前述した皇慶説長宴筆の『四十帖決』巻十二には「受明灌頂」の段に

師ノ曰ク。移シテ弥陀ヲ安ス大日ノ位ニ。乃至天等者。是秘密壇中ノ行法ナリ。是大阿闍梨為ニ第三ノ三昧耶ト受明灌頂也。授ル受明一時ハ、隨ヒ要ニ安スレ之ヲ也。非ニ常途ノ作法ニ。努努具ニ如シ持誦不同第七卷ノ云云。
（『大正蔵』七五・九三六頁・上、金剛三昧院本十一帖八葉）

と大日を弥陀位に移す記述があり、安然の『大日経供養持誦不同』を典拠とし、大日以外を中尊とする曼荼羅の一例に阿弥陀を挙げている。また、皇慶、長宴の弟子で三昧流の祖、良祐の『三昧流口伝集』「対大曼陀羅移本尊事」（『大正蔵』七七・三三三頁・中）にも『大日経義釈』に依る形で弥陀と大日の交替を説き、「日野ノ庄ニ安ニ置ス五仏ヲ。但タ以テ阿弥陀ヲ為シ中尊ト。以テ大日ニ安ニ置ス弥陀本位ニ」と法界寺の例が挙げられる。以上のように台密における大日・弥陀の交替は、弥陀を例

に挙げるものの、弥陀に限る内容とは捉えられない。

四 東密文献における記述

東密において大日位と阿弥陀位の交替を説く文献としては、まず永嚴撰『要尊法』が挙げられる。

次第ニ觀シ了リテ大日如来ハ心月輪中ニ有リ我、成ニ開敷紅蓮花ヲ。以テ独古ヲ為ス茎ト。大日ノ挙体ハ開敷紅蓮花也成ニ八葉赤蓮華ヲ。變シテ成ニ阿弥陀如来坐ヲ。……中略……正念誦ハ大日阿弥陀ノ真言共ニ以テ誦スルナリ之ヲ。古師ノ説カク阿弥陀ノ中台ニ坐スル時、大日ハ西方ニ居ラ替エ給フ云云
（『大正蔵』七八・一九五頁・中〜下）

大日如来を觀じ終わると弥陀の種子衆になる、大日如来の全体が開敷紅蓮華（弥陀の象徴）であると言い、大日・弥陀の交替が説かれている。さらに、覚鑓『金剛界沙汰』においては、金剛界曼荼羅の一印会に言及する箇所では

五処ニ配ニ立スルニ五智ヲ有リ二義一。
不空左肩 大日額 無量寿喉 阿闍 菩提心義 心
無二此義一 宝生右肩
或 不空左肩 大日喉 阿闍 心
無量寿額 宝生右肩

大日ハ三世常住ノ仏以テ無量寿ヲ表スアリ之ヲ。人ノ喉ハ寿也。大日弥陀一仏ノ義。能成ハ妙觀察智無量寿、所成ハ大日ナリ。云云

（『興全』上・七二八〜七二九頁）

と中尊を大日とする曼荼羅と、中尊を弥陀として大日を弥陀位に移す曼荼羅の二種を説き、二義あることを「大日弥陀一仏の義」によるとしている。つまり東密文献においては、大日位・弥陀位交替の思想的背景として、「大日と弥陀の団体」を説く。密教においては、全ての尊格が大日如来に帰するため、大日と弥陀の団体を説くことは東台密共に特別なことではないが、本尊位の交替についてこのような説明がなされるのは東密のみであり、東密の特徴と言える。これについては、例えば覚鑿が『五輪九字明秘密釈』において「大日即弥陀」を説くが（『興全』下・一二二頁）、東密ではこういった思想によって意味付けを行ったと考えられる。

五 まとめ

以上より、特に台密において用いられた『大日経義釈』に説かれる曼荼羅上の大日・弥陀の交替は、台密においては阿弥陀法の曼荼羅もしくは受明灌頂の曼荼羅の一例として理解、発展していった。しかし、東密に至ると、「大日即弥陀」という思想で意味付けされる過程が見て取れた。すなわち平安中期頃、皇慶を始め事相面の東台密交流が盛んであり、早い時期より台密事相文献の『四十帖決』が東密で読まれていたことから、台密で先に行われていた大日・弥陀の交替が東密へ伝わり独自の発展を遂げたと考えられる。

また、このように東密が阿弥陀を中心とした事例を取り入れる契機としては、平安時代後期に興隆した浄土教の影響が考えられ、大日・弥陀の交替を説き始めるのが覚鑿の『五輪九字明秘密釈』にて「大日即弥陀」と説かれる以前であることから、教相的思想成立以前の事相的事例と解釈することもできるのではないだろうか。

- 1 柳澤孝・三浦定俊「赤外線テレビカメラによる堂塔莊嚴画の調査研究―主として法界寺阿弥陀堂の四天柱絵について―」（古文化財編集委員会編『古文化財の自然科学的研究』同朋舎出版、一九八四）、富島義幸『密教空間史論』百七十四頁・法蔵館、二〇〇七参照。

- 2 『真言宗全書』二十九・一〇七頁・下、二十八・三一頁・下参照。
- 3 『日仏全』一二六・五六一―五六二頁、一〇一・一九六頁・下参照。

- 4 『大日本史料』第二編之四・九三二頁―九三三頁・「青蓮院文書」『僧寂照授皇慶印信』。

- 5 安然『大正蔵』七五・三三七頁・下。覚超『大正蔵』七九・七一九頁・中。

〈キーワード〉 日本、平安時代、『四十帖決』、皇慶、覚鑿、曼荼羅

（龍谷大学大学院）